

## アブダビとドバイの日本人学校で小石丸を飼育

日本とUAEの友好事業として子供たちが実践

かつて世界一の輸出量を誇っていた日本のシルク産業の復活に向けて、日本とUAEの小学校で日本の固有種である「小石丸」の飼育運動が始まります。東京都内の五つの小学校とUAEのアブダビとドバイの日本人学校の合わせて七校が参加。「TOKYO・UAEシルク協議会」(事務局・東京都日野市)が中心となり、東京農工大学が小石丸の飼育を全面的にサポートしていきます。



### アブダビの日本人学校はエミラティも参加

アブダビ日本人学校(梶山明彦校長)は一年生から六年生全員で小石丸の飼育に参加。特に同校は世界で唯一、現地の子息を受け入れています。児童は持参した小石丸の繭に驚きながら「これが生糸の素で、アバヤにも使われているのですね」と興味を示していました。梶山明彦校長は、「日本のシルク産業の復活のきっかけになれば素晴らしい。現地エミラティにも日本のシルクの良さが直接伝えられるよう協力していきます」と笑顔で話していました。



ドバイ日本人学校(山本昭比古校長)は五年生が中心に参加。転校前に数人の児童が理科の授業で蚕の飼育を経験してはいるものの、ほとんどの児童は蚕の実物を見たことがなく、飼育方法のスライドを見ながら、「小石丸の名前の由来は「蚕はいつかから存在しているの」「蚕はどれくらい生きているの」など活発な質問が出ていました。

### ドバイでは、日本との交流に歓喜



同校の山本昭比古校長は、「日本の産業復活のため、海外の地で子供たちが携われることは、素晴らしい学習になる。日本の子供たちにUAEの様子も伝えながら積極的に進めていきたい」と期待を寄せています。今後、両校は京都工芸繊維大学の田昌利教授から贈られる小石丸の卵が到着次第、飼育を開始。餌となる桑の葉は期間中三回ほどに分けて日本から空輸予定で、飼育そのものは来春まで三回を予定しています。

